

聖マリア病院新生児科における 重症仮死満期産児の実態と問題点

(分担研究：ハイリスク児の調査に関する研究)

研究協力者 橋本 武夫
共同研究者 出 良 弘

要 約：平成3年に聖マリア病院新生児科に入院した重症仮死満期産児について、その妊娠中の経過から退院後の状況までを調査した。院内出生児に比べ院外出生児の予後は明らかに不良であることを再認識した。

見出し語：重症仮死児、CTG、後障害

研究目的と方法：ハイリスク児の実態把握のためにはどのような調査方法が適切であるかを知るため、平成3年に聖マリア病院新生児科に入院した重症仮死満期産児について、その妊娠中の経過から退院後の生活状況までを調査した。

結 果：平成3年に当院に入院した新生児は926例であり、このうち在胎37週以上の満期産児は475例であった。この満期産児のうち、今回調査の仮死の条件を満たす症例（アプガールスコア1分4点以下、または5分6点以下）は42例であり、6例が院内出生、36例が院外出生であった（表1）。院内出生6例のうち、1例が里帰り分娩であったが、他の5例は何等かの妊娠・分娩合併症のために当院産科に紹介された症例であった（先天奇形2例、前置胎盤1例、骨盤位1例、分娩遷延1例）。院内出生全例にCTGモニ

ターが施行されていたが、異常を認めていたものは2例のみであり、うち1例のみ帝王切開にて出生している。

院内出生6例のうち死亡した2例はいずれも横隔膜ヘルニアの手術後であった。院外出生36例のうち死亡した6例は、染色体異常2例（13トリソミー、5Pマイナス）、胎便吸引症候群が主因の呼吸不全によるもの2例、帽状腱膜下出血による循環不全によるもの1例、無酸素性脳症による長期入院中の合併症によるもの1例であった。また院外出生のうち2例が無酸素性脳症のため長期入院中である。

院内出生児で生存している4例はいずれも後障害を認めていない。院外出生児で生存している30例のうち明らかな後障害を認めるものは5例（うち1例は染色体異常（DOWN症候群）による）、不明5例である（表2）。

考 案：当院で院内出生全例に新生児科医の立会いが行われていることが、重症仮死児の発生率には院内と院外の差は少ないものの死亡症例・後障害例の発生が少なくなっている要因と考えている。院内出生例は全例CTGモニターが施行されておりそれなりの対応（緊急帝王切、仮死児出生に対する蘇生の準備）が行われている。院

外出生児の場合のCTGモニターの利用に関しては今回の調査ではデータが不足しており評価は困難である。しかし、仮死出生児への対応の違いは十分想像される。

重症仮死児発生の予防については、出生直後の十分な対応の徹底がより重要であることを再認識した。

平成3年重症仮死児症例

	入院数	37週以上	37週未満
入院数	117/926	42/475	75/451
院内出生	56/336	6/72	50/264
院外出生	61/590	36/403	25/187

重症仮死児の予後

	正常発達	後障害あり	死亡	不明
院内出生 6例	4例	0例	2例	0例
院外出生 36例	20例	5例	6例	5例



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約：平成3年に聖マリア病院新生児科に入院した重症仮死満期産児について、その妊娠中の経過から退院後の状況までを調査した。院内出生児に比べ院外出生児の予後は明らかに不良であることを再認識した。